



研修医へのメッセージ

豊見城中央病院 整形外科部長 永山 盛隆



今回、＜若手コーナー＞への寄稿依頼があり、うっかり自分が若手医師の代表の一人として書かせてもらえるかと勘違いをしてしまいました。今年はどうとう50歳の誕生日を迎えてしまったのでとても若手とは言えませんが、精神年齢が低いせいか親子程の年齢差がある若い研修医と一緒に違和感はありません（相手はどう感じているか知りませんが…）。

現在、私は整形疾患の患者様を相手に忙しくも充実した楽しい毎日を送らせてもらっています。当院は後期研修医を含めて13名の整形外科医が勤務しており、人工関節の手術件数は年間500件を優に超え、全国でも有数の整形外科病院として評価されています。とても忙しい中、体力的には年齢と共に下降線をたどるのは致し方ないことですが、せめて気持ちだけでも研修医時代のモチベーションを持ち続けていたいと肝に銘じています。

そこで研修医の皆さんにエールを送るために私の研修医時代のことを振り返りながらお話をさせていただきます。

私は昭和58年に名古屋大学をやっとの成績で卒業し、何とか国家試験もクリアして大学の関連病院へ就職致しました。当時の名大は他大学とは異なり卒業すぐに入局する人は少なく、現在の研修制度と同様に学外の病院で初期研修を行い、その後で希望の科に入局するパターンがほとんどでした。県立中部病院の研修医試験に不合格となり、卒業試験と国家試験で精一杯だった私にとって何の科が自分に合っているのか、一体何をやりたいのか見つける時間が全くありませんでした。名大にいてとても幸運だったと思っています。

研修の基本はまず救急医療をマスターすることからだと考え、部活の先輩のつてを頼って愛知県安城市の中核病院で消化器外科半年、内科半年のローテーションをさせて頂きました。救急病院ゆえに消化器以外の他科の症例も数多く経験することができました。全く何も出来ない就職1週間目にいきなり当直を言い渡されました。そしてその日にCPRの症例が運び込まれ、現場の緊張感を嫌というほど味わってしまいました。幸い仕事のできるナース陣と偶々居残りの上級医がテキパキと対応して下さり事なきを得ました。実は当病院は当直でもないのに何人かのドクターが泊まることが多く、何かにつけ助けられる場面がありました。私も毎月3千円の家賃でアパートをあてがわれていたのですが、洗濯のため月3日程帰るくらいでほとんど院内生活をしていました。お陰で当直に関係なく救急外来・病棟・手術室で多くの経験を積むことができました。

現場では基本的な医療行為をナース（当時は全て女性で、各部署に必ず主がいました）から学ぶことも多く、いろいろ厳しい躰を受けました。研修3ヶ月を過ぎた頃から立場が逆転したように記憶していますがいい勉強になりました。今でもナースとは変な意味からでなく仲良くすることが大切と考えています。例えば夜間当直の際に病棟などからコールを受けた場合、どんな内容でも決して怒ることなく感謝して対応することです。怒ると次からは大事な情報の提供も受ける頻度が減るばかりでなく、助けられなくなるのです。初めのうちは周囲から〇〇先生と言われくすぐったい気分であったのが、慣れとは恐ろしいもので無意識のうちに

「私は先生」が当然となり、逆に〇〇さんと呼ばれると変にムカツク自分が見え隠れするのです。難しいことですが初心忘るるべからず、常に謙虚さを持ちつづけることがこれからのドクター人生には求められるのです。医療は絶対に一人ではできないのですから。

私にとって毎日が新鮮な経験を積める研修1年目でした。1年目ながらも学会発表の機会を各科で与えられました。“やる気がある”と上級医に認められればOPも執刀させてもらいました。例えば虫垂炎手術を半年の間に17例程担当させてもらい多少の自信ができました。麻酔でも自信をつけさせてもらいました。その頃の麻酔は研修医の仕事で呼吸管理はレスピレーターを使用することなく全て手動でした。眠くなるので立ちながらバッグを握るのですが結構きつい仕事でした。昼食兼トイレの30分の休憩を許されるのみで13時間もの手術をずっと手動で維持したことがあり、腕のだるさと指先のしびれで最後の1時間の長かったことを今でも忘れません。研修医はまず何と言っても体力なのです。難儀な経験から自信は生まれてくるものです。私の場合も1年目に難儀をさせてもらったお陰で今でも難儀な仕事を大して辛いとは思わないで過ごすことができます。難儀で忙しい事はむしろ楽しい事であり、辛い事ではないということを若い先生方は覚えてください。逆に暇で自分のやりたいことが出来ないことはとても辛いものです。

1年の研修を終えて、その間に自分の方向性

も何とか見つけることができ、琉球大学整形外科に入局が決まりました。病院送別会で院長（一見やくざ風だが気の優しい外科医）に「おみゃーさんはいい医者になるよ」と言われ、それに少しでも応えるよう頑張ってきたような気がします。私にとって忘れ難い有意義な1年間であり、現在でもその頃の医療精神が生き続けていると確信しています。現在の研修カリキュラムを見ていて、単なるポリクリの延長になるかもしれないことを危惧しています。如何に新鮮で実り多き内容にするかは、皆さんがアクティビティ・モチベーションを如何に持ち続けて行動するかということにかかっているのです。既に専門科目を決めている方もおられるでしょうが、本当に納得の行く進路を見つけることはとても難しいことだと思います。

20年以上前とは医療の質・制度も異なるためあまり大したことは言えませんが、限られた研修期間に周囲に流されることなく積極的に自分探しをしてみてください。受け身はいけません。

ここまで話すとも病院長でほとんど院外には出ない生活に終始したと思われるでしょう。実は病院の傍には広いグラウンドがあり体育会系のドクター集団故に早朝野球の練習があり、試合にも参加していました。アフター5の飲み会（当時、カラオケでは杏里のキャッツアイが流行っていました。）も盛り上がりたりして、決して堅物生活ではなかったことを申し添えておきます。

研修時代を精一杯エンジョイして下さい！

原稿募集！

「若手コーナー」(1,500字程度)の原稿を随時、募集いたします。開業顛末記、今後の進路を決める先生方へのアドバイス等についてご寄稿下さい。